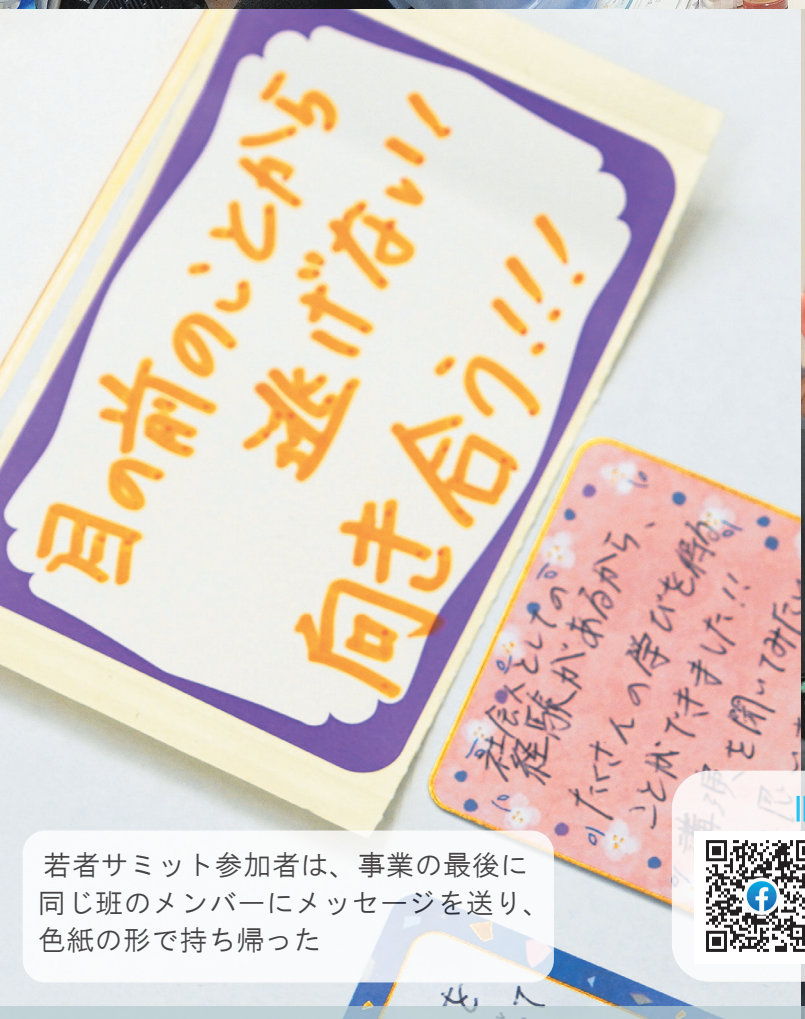
日本青年団新聞

Youth Post

百花繚乱

2026 vol. 2
111巻第2号　発行2026年5月1日
編集・発行 日本青年団協議会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web https://www.dan.or.jp/



若者サミット参加者は、事業の最後に同じ班のメンバーにメッセージを送り、色紙の形で持ち帰った

INFORMATION　日本青年団協議会の最新情報はこちらから

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

若者のつながりが地域を照らす

～出会い、語り合って得た新たな一歩～

3月7日～8日、**日本青年団協議会**と**（一財）日本青年館**が共催する全国まちづくり若者サミット2026が、日本青年館を会場に開催された。全国から約100人の参加者が集い、会場は大入り満員となった。この若者サミットは、各地で活動する青年団や様々な若者団体が集い合い、グループ討議や全国で活動する若者団体の実践事例を聞く等を経て、参加者の活動が少しでも前進するきっかけや、参加者間の交流をつくることをめざした。

様々な事例発表に学ぶ場でもあるサミット

◆初参加者の気持ち

参加者の平均年齢は29歳。高校生・大学生や新卒間もない社会人も多く集まった。山形県・南陽青年団の佐藤煌晟（こうせい）さん（20）は、今回初めて参加した。自分の団体には2つの大きな事業以外にはあまり活動がないことに課題感を感じ、誘いがあった際に手を挙げた。自分の地域で当たり前と思っていたことが、他から見ればすごいこと、という実感を両面から得た。それまで、他地域の若者団体との交流が少なかった佐藤さんにとって、「同じ気持ちで頑張っている仲間が全国にいる」ことが衝撃であったと同時に、何よりの励ましという。今後、同グループで集まり地域行事に参加する方向で動くなど、関係づくりが進行している。

こちらも初めて若者サミットに参加した、宮崎県・西米良村（にしめらそん）青年会の濵砂（はますな）勇二さん（30）は、同青年会の会長である。これまでは既存事業を例年同様に取り組むこと、また自分の青年会だけで取り組む意識が強かったという。しかし、濵砂さんが若者サミットに参加してみた第一印象は「みんなが活気づいている」ことであった。グループ討議で話してみると、他の参加者は地元の課題や地元の未来に向けて、自分なりのビジョンを持って話されていた。対して自分は地元のことをそこまで話すことができず、情けなさを感じた濵砂さん。今回参加してみなかったら「地元西米良村のことをもう少し考えてみよう、学生など若者と共に何かできないか」とは思わなかったかも、と参加前後の変化を語った。

◆対話から実践へ

参加の前後で刺激を受けて一歩踏み出した若者はこの2人だけではない、約100人の参加者がそれぞれに実感している。一人ひとりの変化が、それぞれの地元に変化をもたらして、社会を変えていく原動力になる源流を垣間（かいま）見た。

お問合せ：日本青年団協議会　Mail:jsc_soumu@dan.or.jp

西米良村で開催の第29回やまびこロードレース大会で、主催者を代表して入賞した子どもに賞状を贈る濵砂勇二さん（写真左）

全国に自分と同じく活動する仲間がいることを知り、地元でも団体の中核を担う一人である佐藤煌晟さん（写真中央上）

▶詳しくは6頁「魅力発掘」へ！

「やりたい」を形に

～茨城・埼玉に跨る青年団が誕生～

（茨城県五霞町）

2月22日、茨城県五霞町の福祉センター「ひばりの里」で、**権現堂青年団**の結成式が行われた。同町と埼玉県幸手市の2県に跨って活動する青年団。20人ほどの住民が集まりその結成を見守った。

団長の皿谷倖也さん（24）は、山形県の南陽青年団で活動し、地域おこし協力隊となって五霞町を訪れた。もともと、青年団をつくりたい気持ちがあった皿谷さん。協力隊員の活動の中で、やりたいことがあってもやり方がわからない、仲間がほしいと感じている人たちが周囲に多いことに気が付いた。そうした想いを形にすべく、青年団の結成に至った。団員は現在20～40代の5名。一緒に農業をするなどして徐々に関係性をつくり、仲間が集った。

同青年団は2市町に跨るため、行政との関係性の苦労があるという。青年団という団体のことを理解してもらう難しさも感じる。それでも「青年団」にこだわった。「言葉にして相手に伝えることを大事にしていきたい」と皿谷さんは話す。青年団が行政と住民をつなぎ、共に「やりたい」を形にする存在に。その思いは、全国各地の青年団員の背中を見て、学んだことだ。

青年団を各々の想いを表現できる居心地のいい場所にする。そしてゆくゆくは県単位の青年団を復活させることが目標。彼らの今後の活躍を期待したい。

20人余の住民の見守る中、団結成を宣言

お問合せ：皿谷倖也さん　Tel：070-2037-0714（皿谷）

青年団運動発祥の地で

～山本瀧之助の志が結ぶ地域の力～

（広島県福山市）

青年団運動の提唱者・山本瀧之助*を生んだ広島県福山市沼隈町。その奥組地区で2012年、**奥組青年団**が発足した。中心になったのは、現在副団長を務める青山直樹さん（52）と岩永名津也さん（53）。地域活動として行っていた秋祭りの盛り上がりを、継続的な活動へ発展させたいという思いが契機となった。

瀧之助出生の地でありながら、長年青年団が存在しなかった沼隈町。ここに新たに青年団を立ち上げるには、地域住民の理解と協力を得ることは不可欠だったという。自治会での地域清掃の際に、青年団が率先して行動するなどの積み重ねの一つひとつが、地域の理解と評価の向上につながった。結果として、団員数の増加にも結びついていった。

現在では、30代から60代の約20名が所属し、地域清掃や草刈り、餅つきなど多様な活動を地域の中で担っている。一方で、活動を続ける中では最終的な意思決定を担う責任や、継承者不足等の困難に直面する場面も、決して少なくはない。それでも、仲間と共に集い力を合わせる楽しさが、活動を支えている。

生まれ育った地域に恩返しをしたい――その揺るぎない想いが青年団活動の原動力である、と二人は力強く語った。奥組青年団の歩みとともに、瀧之助の志は確かに受け継がれている。

地域の河川を清掃する青年団員たち

お問合せ：奥組青年団　Tel：090-8713-2632（河野）

＊山本瀧之助（1873―1931）……広島県沼隈郡千年村（現・福山市沼隈町）生まれ。明治～昭和初期の社会教育家。明治期に青年団運動を提唱し、地域における人づくりと社会教育の重要性を説いた。

地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。昨年から始まった新連載「地域活動ラボ」。第11回目となる今回は、宮城県柴田郡柴田町を拠点に活動する「柴田町青年会『雀の一声』」の「ゆずれない特産品PRカフェ」について紹介する。

2025年度全国地域青年「実践大賞」

審査員　棚田　一論
（日本青年団協議会事務局長）

【取り組み概要】

2025年11月、宮城県の柴田町青年会「雀（すずめ）の一声」は、柴田町総合体育館での地元イベントで「ゆずれない特産品PRカフェ」を出店した。この活動は、青年会自身の「活動資金づくり」と、地元名産品である「ゆずのPR」という、2つの目的を掛け合わせて企画されたものである。

実施にあたっては、行政との出店場所の交渉や、地元の農家からゆずのPR方法や「ゆず湯の素」のつくり方を直接学ぶなど、10月からの約2ヶ月間、入念な準備と連携を行った。当日は8名のメンバーで運営にあたり、約2000名の来場者に対してゆず湯などを提供。募金形式で集まった売上約3万円（利益1.5万円）は、青年会の運営資金として活用された。

【解説】

◆課題を掛け合わせ、自ら「財源」を生み出す発想力

青年団に限らず若者団体において、「活動資金の不足」は全国共通の慢性的な課題です。柴田町青年会が秀逸だったのは、この組織の課題を単なる悩みとして放置しなかったことです。地元特産ゆずの知名度向上という地域課題と、財源難という青年団の課題を掛け合わせ、自らの知恵で財源を生み出す事業へと昇華させました。

特筆すべきは、本顕彰制度に前回応募した活動（タイトル「青年カフェのメニュー開発」）での経験を糧にした突破力です。彼らは2024年度、自分たちの拠点の一つである宮城県青年会館に自生するミントを用いて、オリジナル飲料をつくり販売する企画を立案します。しかし食品衛生法の制約に直面し、当時は取組の継続を断念していました。

ここで立ち止まらないのが、彼らの素晴らしいところです。保健所への相談を通じて、露店営業の枠組みであれば提供可能であることを突き止め、法規制を逆手に取ってゆず湯という突破口を見出します。さらに行政との交渉においても、これまでイベント会場に出店していたキッチンカーの多くが甘味中心である、と過年度の出店一覧から分析しました。そのうえで、ホットドリンク需要を補完する、という明確なメリットを提示します。他店舗とニーズ（需要）が被らないことをアピールし、見事に出店枠を勝ち取ることができました。

外部の補助金に頼るのではなく、地域のニーズを読み解き、自ら価値を提供して対価を得る。この自律した組織運営への姿勢は、持続可能な活動のモデルと言えます。

◆身体感覚を伴う「当事者意識」の醸成

課題解決において、データや理屈よりも強

2月～4月の日青協の動き 令和8年北方領土返還要求全国大会

2026年2月7日、国立オリンピック記念青少年総合センターで北方領土返還要求全国大会を開催。実行委員会を代表して杉山会長が挨拶し、高知県青年団協議会の西村事務局長も登壇、若い世代が自分事として問題を捉える意義を示した。

北方墓参の早期再開や返還運動推進を盛り込んだ大会アピールを全会一致で採択し、官民一体で運動を継続する誓いとともに大会を閉じた。

この間の日青協役局員の動きを、紙面をお借りして読者の皆様にご報告いたします。よりリアルタイムな情報は、日青協公式インスタグラムにて発信しておりますので、併せてご覧ください。フォローお待ちしております。

い原動力となるのは、現場のリアルです。メンバーは単に柚子を仕入れて販売したわけではありません。地元の農家と直接つながり、ゆずの収穫、ゆず湯の素づくり等を共に体験しました。

ゆずの木の幹には鋭いトゲがあり、収穫作業には痛みが伴います。収穫した実を一つひとつ手作業ですりおろし、砂糖をまぶしてジャム状に仕上げる……工程は決して楽なものではありません。しかしこの泥臭い体験が、メンバーの間に確固たる当事者意識を芽生えさせました。企画から事業当日までの期間は、わずかに1か月。「時間をかけると熱が冷める」という彼らの流儀に基づき、短期集中で駆け抜けます。このスピード感も、現場での熱量を維持するために不可欠な要素でした。苦労して自分たちの手でつくり上げた1杯であればなおのこと、来場者に提供する際の一言に説得力が宿ります。オンライン上の知識ではない、身体感覚を伴う地元愛が、来場者の心を動かす説得力を生みました。

◆対話から生まれるフィードバックと「次」への確信

今回、あえてカフェという手法で臨んだ最大の意義は、来場者との双方向コミュニケーションにあります。カフェという場は、会話が自然に生まれるように設計されています。お客さんに商品を渡して終わりではありません。提供する数十秒の間に、柴田町のゆずの魅力を伝え、そこからの反応を直接受け取ることができました。

事業当日、延べ２０００人の来場者から寄せられた「香りがすごい」「飲みやすい」というダイレクトな声が数々寄せられました。これが、メンバーにとって何よりの励みとなります。自分たちの活動が、地域の価値を再発見させ、誰かを笑顔にしているという手応えは、当事者の若者たちにとって強烈な自己肯定感にも、また自信につながります。こうした成功体験は次の活動の原動力にもつながり、組織を強くします。

◆地域の課題は自分たちで乗り越えられる

本実践は、特別な予算や機会がなくとも地域や団体自身の「課題の解釈」を変えられること、そして自ら現場に飛び込み、周囲を巻き込む対話を諦めなければ、状況は変えられることを示しています。地域の課題を見出し、地元の大人を味方につけ、自分たちも汗をかいて形にする――この一連のプロセスは、全国の若者たちが自身のまちの課題に立ち向かうための、力強い道標となるでしょう。自らの手で地域を少しだけ良くしていく。その一歩は、一杯の温かいゆず湯からでも始められるのです。

●お問い合せ
Instagram にて「雀の一声」と検索
QRコードはこちら→

テントも用意してゆず湯を販売する準備が完了

立て看板も青年団の手づくり

毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊 1957 年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体 741 円＋税
旬報社 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 544 中川ビル４F
TEL03-5579-8973 FAX03-5579-8975 http://www.junposha.com/

日本青年館ホール 検索
「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードよりお読み取りください。
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL:03-6447-5660
ACCESS：東京メトロ銀座線
外苑前駅2b出口より徒歩5分
私たちは日本の社会教育と全国の青年団を応援しています。

魅力発掘

もっと知りたい！

全国まちづくり若者サミット

本企画「魅力発掘」では、２ページのActionで取り上げた、実践を行う青年団の活動やその活動地域を深堀り、その魅力を紹介します。
第３回となる今回は、２ページに続き全国まちづくり若者サミットの魅力を発掘します！！

◆全国まちづくり若者サミットとは

全国まちづくり若者サミット（以下、若者サミット）は、（一財）日本青年館が２０２０年２月に初開催して以来、今回で７回目を迎えた。近年、政府の地方創生の動きや18歳選挙権の導入など若者による活動が活性化する中で、地域や団体の枠を超えた学びや交流の場がないことが課題であった。そこで、それら若者が出会い、学び、交流する場をつくり、それらの情報を発信する「プラットフォーム」としての役割を担うべく企画されたのが若者サミットである。当初は全国で活動する15から20団体程度が集い、２日間にわたって互いの事例発表に学び合う事業であった。２０２４年度からは、対話の中から互いに学び合うという、従来から青年団が取り組んできた学習の要素をより取り入れるとともに活動に取り組む若者有志を募った実行委員会制をとり、どのようなテーマを設定してプログラムで何を学ぶのか、多様な参加者の顔を思い浮かべながら実行委員自身が考案して当日の運営も行うスタイルとしてきた。実行委員会でのあらゆる議論を重ねてきた経験を通して、自分の世界や広がるとともに充足感や満足感を覚え、翌年も実行委員として経験を役立てたいと思う者、自団体に学びを還元して地域をよりよくしたいと思う者、地域性をいかした就職先を選択する者――ここでの体験が、個人はもとより周囲にも波及効果を生んでいることは言うまでもない。

◆実行委員を担うことで身に着いた主体性

事あるごとに盛上げ役を買って出た島貫さん

ここで、一人の青年を紹介したい。山形県・南陽青年団の島貫旬（しゅんと）人さん（20）は、同青年団の高校生向け事業に参加した体験もあり安心感を得られたことから、２０２４年の10月に入団した。初めは、楽しみたい、上の人に言われたら「駒」のように動こう、という気持ちでいた島貫さん。しかし青年団事業が時期的に少なかったり、参加しないこともあり、しばらく参画していなかった。状況が一変したきっかけは、翌３月に参加した若者サミット２０２５であった。ここで彼は、全国で地域活動に取り組む同世代の存在に、強い衝撃を受ける。すでに実行委員として企画運営の中核に携わる者、地元をより良くしたいと熱弁する者……状況を目の当たりにした島貫さんは、「駒」でいてはダメだ、人に動かされるだけは成長できない、と痛感した。加えて、翌年に実行委員長を務めることになる同い年の宇佐原嘉晃（うさはらよしあき）さん（20）からも、実行委員への誘いを受けた。「彼と一緒に挑戦したい」と強く思った島貫さんは、次回の若者サミット実行委員に手を挙げた。

実行委員会に入ると、月２回のオンライン会議が始まった。当初は、なかなか自分の意見が言えない、と実感を持っていた島貫さんだったが、８月の実行委員合宿で初めて他の実行委員と顔を合わせる。そこでは意見や背景が異なる若者同士が意見を交わし合って、テーマを議論していた。「人の意見に流される必要はない」ことを経験した島貫さん。ちょうどその頃、南陽青年団も主催事業に向け動き出していたが、地元では一つの案が出ると対案や反対意見が少なかったように島貫さんは感じていた。モヤモヤとした想いを抱えていたものの、流しても良いか、みんながそれで良いなら、と軽い気持ちを持っていた。しかし実行委員合宿を経て、「衝突を避け」ることなく、主体的に表明していく方向へと考えを改めた。その効果は地元でも発揮され、南陽青年団での次の事業の企画段階では、みんなで変わろう、と主体的に発信できるようになっていった。

周りの意見に流されがちだった一人の青年が、若者サミットと出会い、いま輝きを放ちつつある。実行委員会がその輝きを支える場としての役割も果たしたことはもちろん、若者サミットが一人の若者の人生を変えた、と言っても過言ではない。次回の若者サミットは、２０２７年２月13日～14日である。会場が満員の熱気に包まれた今回以上に、対話を通じて刺激を受け合い、学び合えるプラットフォームの役割を果たしていく。

Youth 掲示板

みなさんの想いや考え方を交換する新企画。
どなたでも投稿できる掲示板です。投稿する内容はちょっとしたことでOK！
新聞への感想、事業の告知・報告、日頃考えていることや悩み、ちょっと誰かに伝えたいことなどなど、なんでもお寄せください！

地球旅豆本に北方領土集会の報告記事を寄稿

山口大学の学生たちが、海外留学の体験をまとめた小冊子「地球旅豆本」を2026年２月末に刊行しました。海外の美しい風景や文化を楽しめるのはもちろん、留学時のトラブルや費用などリアルな体験も記載されており、これから海外留学や旅行しようと思っている人たちにとっても役立つ１冊となっています。この本は大学生だけでなく大学生の思いに共感した社会人も寄稿していますが、2025年に山口県青年団も参加した、日青協主催の北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の記事を掲載させていただきました。世界の色々な場所に訪れることはできても、日本には現在、自由に行けない場所があります。いつか北方四島に訪れて、自由に風景を撮りたい、そんな思いを込めて記事を書きました。団員が本土から撮った四島の美しい景色も掲載しています。地球旅豆本は１冊550円、山口県内の書店またはオンラインで購入できます。ぜひお手にとってご覧ください。

（山口県青年団・久保　博成（ひろあき）　30代）

第142回定期大会を開催しました！

４月11日に沖縄県青年団協議会の第142回定期大会並びに第１回理事会を開催し、無事に全議案の承認をいただき令和８年度の沖青協活動がスタートしました！会長を５年間務めた普天間真也が退任し、新たに座間味周（ちかし）が会長として就任します。長い間支えてくださった全国のみなさまに御礼申し上げます。

（沖縄県青年団協議会副会長　仲桝　人生（ひとき）　30代）

土佐市青年団が地域食堂？！

地元土佐市で地域食堂を運営していた有志のみなさんから食堂を辞めてしまうというお話を聞き、「地域の方々・こども達の居場所をなくしたくない！」という思いから一念発起し土佐市青年団が運営する“世代交流食堂なぶらっこ”を昨年度からスタートしました。

何もかもが初めて・手探りの中でしたが、地域の多くの方々に支えられ、毎回大盛況の食堂になっています。青年団が“つなぐ”地域の居場所の大切さを改めて感じながら、２年目もみんなと一緒に盛り上げていきたいと思います。

土佐市青年団、まずは動く！

（高知県・土佐市青年団・松岡　太一・30代）

会員、大募集中！

長沼町青年団体協議会では、会員を募集しています！18歳以上であれば加入できます！現在、多種多様な職種の会員が地域活動・社会教育活動をしています！ぜひ一緒に活動しましょう。まずは気軽にお問い合わせください★（北海道・長沼町青年団体協議会　愛称：ぬまだん・30代）

Youth 掲示板投稿募集♪

投稿はどなたでも可能です！
右記二次元コードからぜひお寄せください。
みなさんの投稿をお待ちしております！

NISSEIKYO

OPINION　見えない奮闘と磨き合う個性

表紙にも掲げた今号のテーマ「百花繚乱」とは、色とりどりの花が咲き競うように、多様な個性が集まり、豊かな成果や活気が生まれる姿をいう。それは一人の英雄を飾る舞台ではない。各々が異なる持ち場で責任を果たし、個々の光を放つ情景である。私たちは活動を通じて多くの他者と出会う。気の合う者ばかりではない。だが、その噛み合わなさや違和感は、相手と自分の個性を見出す入口になる。

本人も気づいてない長所を、周囲が先に見抜くことは多い。青年団の父・田澤義鋪は「青年は青年によって磨かれる」と説いた。現場で膝を突き合わせ、摩擦を避けずに関わることで、自分の輪郭も相手の強みも見えてくる。独りで完結する輝きなどない。もし単独で輝くように見える者がいるなら、その陰には必ず支え合い、時には厳しく向き合った相手がいる。

地域活動も同様だ。当日の華やかさの裏には長い準備があり、終われば黙々と片付け、礼を尽くして回る人がいる。また、その感謝を受け止める側も、活動を次代へつなぐ大切な担い手である。表に立つ者だけが活動をつくるのではなく、裏側を担う者がいることで、初めて全体が動く。

世界は誰かの仕事でできている、とは缶コーヒーのCMに登場する名言だ。私たちの活動は、誰かの見えない奮闘の上に成り立っているし、その逆もまた然りである。光の当たりにくい仲間の魅力と、自分のまだ見ぬ力を、現場の熱量の中で見つけたい。異なる個性が支え合う百花繚乱の中でこそ、互いの違いは力へと変わる。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.65

大学生サークルから青年団へ

本杉　大地さん（21）（静岡県・有度青年団）

元から地域貢献に興味があり、大学でも複数の社会貢献系サークルで活動してきた期待の新人、だいち君。所属サークルと青年団が協同して、宅配サンタや全国青年大会の舞台発表に出演するなど、青年団と共に活動してきた。そして大学卒業が近づいてきた時のこと、静岡で生まれ育ち地元が大好きな彼は、これからもずっと暮らしていくこの地域をもっと楽しく、ワクワクする場所にしたい、と改めて考えた。そして卒業後を見据え、地域の人と大学サークル時以上に近い距離で関わっていくためには、これ（青年団）だ、と考えて入団を決めた。

観光分野にも興味があり、静岡の魅力を県外に向けてもっとアピールできる企画を考えたい、と意気込む。学生生活やサークル活動で学んだ知識、出会い、そしてこれから青年団が培い積み上げてきた歴史を学び、新しいことにチャレンジしていくだろう。成長し、地域と青年団を盛り上げていく存在となることを期待したい。

●山梨　剛（静岡県青年団連絡協議会会長）より投稿

＊静岡、ばかいいら？みんなでやらざぁ

＊「静岡、すごく良いでしょう？みんなでやろうよ！」の意

編集後記

先日、素爪が美しい方にお会いした。飾らずとも輝くその爪の奥には、きっと毎日の丁寧な手入れが積み重なっているのだろう。人も同じではないだろうか。一度の輝かしい実績だけで人は深まらない。様々な経験を経て、失敗も重ねながら、地道な努力を土台にしてこそ、本当の厚みが生まれてくる。目立たない積み重ねの先に、豊かな人間としての姿がある。そんな深みのある人へと、少しずつ育っていきたい。（み）

NISSEIKYO

最新の情報はこちら

https://www.facebook.com/nisseikyo01/

Recommend れこめんど

あまり知られていないすてきな場所や食べ物…地元のおすすめを青年団のエピソードも交えてご紹介します。

高知県の青年団では、地元の偉人を題材にした演劇活動に取り組んでいます。その一人が、大河ドラマ化が先日決定した「ジョン万次郎」です。僕たちは約10年前から、万次郎の出身地である土佐清水市、そして大冒険始まりの地・土佐市に県内各地から青年団員が集い演じてきました。この活動は演技の上手さだけを追求するものではありません。生まれ育ったまちの歴史を学び、先人の思いに触れながら仲間と共に表現する。その過程で、自身と向き合うきっかけにもなっています。今後も地域と共に学び、共に成長していきます。万次郎が世界へ挑戦したように、僕たち青年団も地域から未来へ挑戦し続けていきます。

●宮崎　果七（高知県・土佐清水市青年団　団長）より投稿